

八年目の歩み

— 広島芸術学会 平成六年度活動報告 —

米 門 公 子

▼平成六年七月二十二日(金)・二十三日(土)・二十四日(日)

第八回大会は、同時期に広島で開催されていた日韓学生美学研究会との共催行事「萩陶磁器研究旅行」から始まった。JR広島駅北口とJR五日市駅を出発する二台のバスに分乗して、まずは山口県立美術館へ。

萩市内の「萩本陣」で、韓国からの研究者や陶芸家、一般参加者、当学会会員が一堂に集い、交流会を兼ねて和やかに昼食をとった。その後、「菊屋家住宅」「ギャラリー斎藤庵」「坂壺元」を見学して帰広した。二十三日・二十四日は広島修道大学に会場を移して、総会・大会が開催された。総会では、平成五年度の事業報告、決算報告および監査報告がなされ、続いて六年度の事業計画、予算案が承認された。

引き続き開かれた大会では、金香美氏(広島大学大学院生)が「韓国の近代教育創始期における美術教育について」、田谷行平氏(画家)が韓国展「広島の現代の美術展」、権寧弼氏(高麗大学教授)が「美術史研究における『層構造』の問題」を発表した。終了後、メルパルク広島で懇親会が開かれた。

翌二十三日の午前には辛那昶氏(嶺南大学大学院修了)が「ジョシュア・レイノルズの論文における『自然一般と荘重様式』」、河野石根氏(明星大学教授)が「無釉陶器の美」、嶋屋節子氏(広島大学教授)が「高麗茶碗の光と影」と題する発表を行った。

午後は、多田愉可氏(ピアニ)、高松寛子(ヴァイオリン)、藤井美由紀氏(ピアノ)らによるミニコンサートの後、日韓共同シンポジウム・東西の芸術と美意識「異文化交流時代の芸術」について」が開催された。司会は金田晉氏、基調報告は佐々木健一氏(東京大学教授)が行い、パネリストは兪俊英氏(梨花女子大学教授)、権寧弼氏(高麗大学教授)、尹光照氏(陶芸家)、関周植氏(嶺南大学教授)、松本真氏(広島修道大学教授)、青木孝夫氏(広島大学助教授)が務めた。参加者は約六十名。

▼八月十日(水)

「会報」第二十九号発行。掲載記事は第二十八回例会の「奈義町現代美術館を見学する」(報告者・加治大作)のほか、巻頭「第八回広島芸

術学会大会を終えて」(金田晋)、当学会主催「アジア競技大会支援チャリティー美術展」の案内等。

▼九月二日(金)

第二十九回例会が、広島文化デザイン会議の一つの分科会として国際広島会議場「コスモス」の間で開催された。内容は、広島在住の美術作家を迎え、「作家と地域文化―美術編」へもうちよっと、こんなふうであれば、と題するシンポジウム。コーディネーターは、入野忠芳氏(画家)、パネリストは香川龍介氏(画家)、金本啓子氏(画家)、田谷行平氏(画家)、原仲裕三氏(造形作家)。参加者は会員と一般参加者を併せて、百名を超えた。

▼九月八日(木)～十四日(水)

当学会主催の「アジア競技支援チャリティー美術展」が広島アンデルセンで開催された。九十七名もの美術作家から百四十四点の作品が寄せられ、売り上げ総額は三百三十四万七千六百円に上った。作家への実費返済や展覧会開催経費を差し引いた百八十九万四千二百二十四円を、実行委員の金田晋氏と高木茂登氏が、九月二十七日にアジア大会組織委員会へ届けた。

▼十一月十七日(木)

「会報」第三十号発行。掲載記事は第八回大会発表要旨(報告者・中

神志野、本田代志子、西岡弘勝)と第二十九回例会でのパネルディスカッション「作家と地域文化―美術編」の要旨(報告者・岡村裕恵)のほか、巻頭「アメリカある記」(数野圭一)、ギャラリポート「民俗の秀逸・見世物の憂鬱」(高谷紀夫)、「杉谷富代展を見て」(井野口慧子)、リレーコラム「アイデンティティー」(山内義治)等。

▼十二月十日(土)

第三十回例会が広島市映像文化ライブラリーで開催された。最初に、ジェローム・シャピロ氏(広島大学講師)が「物語映画における苦悩、危機、超越の映像」と題する研究発表を行い、安西信一氏(広島大学講師)が通訳した。続いて水島裕雅氏(広島大学教授)が「海外の日本研究の現状」について報告した。参加者は三十二名。例会終了後、「たつの子」で忘年会が開かれた。

▼平成七年二月六日(月)

「会報」第三十一号発行。掲載記事は第三十回例会での発表要旨(報告者・大石和久、下村智子)のほか、巻頭「年末、年始に思う」(大井健次)、イベントリポート「広島の文化五十年・美術」(寺本泰輔)、リレーコラム「湯布院のまちづくり」(畝崎辰登)等。

▼二月十八日(土)

第三十一回例会が広島女子大学・東千田町校舎(広島大学・旧理学部)

で開催された。発表は永田雄次郎氏（広島大学助教授）が「若山為三と志賀直哉」を、斎藤稔氏（広島大学教授）が「人文学としてのアルス」を発表した。参加者は三十五名。例会終了後、広島を離れることになった当学会委員の斎藤稔氏、永田雄次郎氏、前事務局書記の加藤博子氏を囲んで、「たつの子」で懇親会が開かれた。

▼三月十日（金）

ドイツのグライフスヴァルト大学カスパー・ダヴィット・フリードリヒと研究所講師・ゲルト・ヘルゲ・フォーゲル博士の来広の実現し、講演会が広島市中区の弘法で開催された。タイトルは「ドイツ初期ロマン主義絵画とそのモチーフ」。当学会会員・斎藤稔氏のご息女、斎藤恵理氏（東京在住）が通訳を務めた。参加者は約二十名。

▼五月十五日（月）

「会報」第三十二号発行。掲載記事は第三十一回例会での発表要旨（報告者・吉本麻美、重藤嘉代）のほか、巻頭「マッキントッシュ」（原田佳子）、イベントリポート・ミニ講演会「ドイツ初期ロマン主義絵画とそのモチーフ」（報告者・吉本由江）、リレーコラム「生涯学習の町づくり」（浄謙彰文）等。

▼五月二十七日（土）

第三十二回例会が広島市立大学芸術学部で開催された。まず青木孝夫

氏（広島大学助教授）が「ヴィデオで見る上演芸術―歌舞伎∨他」を発表した。引き続き、大歳克衛氏（広島市立大学教授）が同大学芸術学部設立当初のエピソードや概要などを説明し、その後、同学部事務長および吉井章氏（広島市立大学助教授）の案内で、図書館やコンピュータ室、アトリエなどを見学した。参加者は約四十名。

△平成七年六月末日現在、法人会員十五法人、個人会員二百九名（特別会員五名、一般会員百八十八名、学生会員十六名）▽。

（こめかど・きみこ 広島芸術学会事務局）